

浦佐用媛石魂録

後集卷之七

13
3240
6



門 八 13
號 3240
卷 6

北征年事

昭和十
一月九日
昭求

大葉子者史佚姓氏調吉士伊企儼妻也欽明

三年將紀男麻呂河邊瓊岳征新羅不利

戰已敗而卒亂走伊企儼殿之斬寇無數終

勢窮就禽然不屈焉大罵寇見殺時大葉子從

在陣中與所親俱亦為寇所掠端然立望東方

吟詠國歌且脫領巾麾之憤然自盡矣前集既

引書紀有疑似辨言重著像贊使婦幼知其義

烈蓋是篇所說以伊企儼夫妻事又有之也

文政丁亥冬十一月之吉 蓑笠老逸又識

小本已

金補

石魂錄後集卷之五

序



栲念

志に

心づ

心づ

好

名子

大葉

つ

目

中

室

那

大葉子



浦子

あ

心

雅



博

千鳥

博

松浦佐用媛石魂録前後二集姓氏目次

北條時頼 北條時宗 北條實政 瀬川健三 道孝 長崎頼綱

博多弥四郎素延 博多倍太郎正延 鼠川加二郎武行 長城野兵太敦宗

村山俊平 関蓑七 荒石勘八 牛淵九郎清繩 濱添甲

室津船長乙 瀬川采女吉次 瀬川浦二郎選如 屋主店九郎

根塚語黙齋 姥口歌二郎得時 相肩棒太 下衿宜海邊

奴隷貫九郎 南殿 木綿妙 玉嶋 博多弥四郎妻 秋布

手枕 絲萩 輪栗 千鳥 大覚禪師 岩幕入道 浮實伊加太

筑紫經高 邊蝦ノ平二將純入道 通計三十九名 姓氏目次終

檜垣轉馬 後集出

松浦佐用媛石魂録後集卷之五

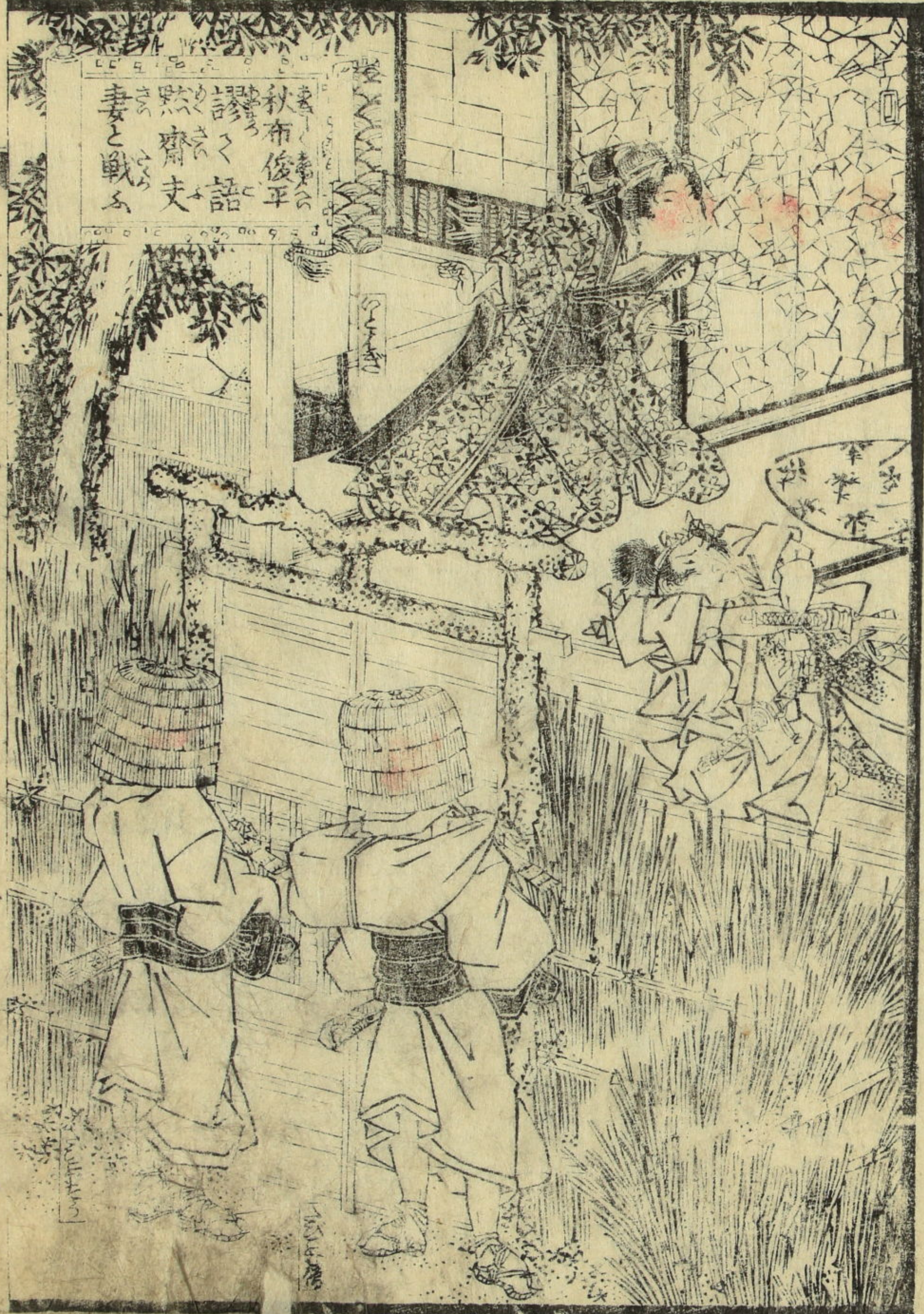
東都 曲亭主人編次

第十九回 伊萬里の宿の親族再聚る

哲婦の城を覆き一念の致を所秋布微弱の女流と又とも資も亦俊
平あり主後殿より大刀透間も踏入々々戦ふめらこの時既に昔存初
燈火を点さる家の内島暗しく進退ある便を益加るるの翁
隻又足人をもとめし近來殊病身も原是武藝の達人を二人を敵
て物ともを障子の布より倚りあはる箴刺の篋を擡取く受流る且
挑之戦の程其門のさるる事ある枕の大刀音は強偷入る處と
素塵を拭る難刀を取卸し鞋を外し出居の紙門を破り用死す
俊平を難んとし刀の光を俊平の主を援る暇もあらずの翁を捨

又も枕と戦ひけり。主従夫婦生死を争ふ。主客の勢ひ芳らむ。優さむ。声をもひ。氣と雷電を敵も。目光を四口の刃を。夜間の山嵐。雷光の軒端を走る。異なるふ。中よ。あ。の。公羽の類。小早。秋布を柱。騒ぐ。氣色も。く。あ。の。隨。は。疲。し。と。吐。と。嘔。と。秋布が刃を礮と。うち。落。し。怯。む。を。ゆ。り。と。突。倒。し。膝。と。杖。と。組布。と。や。ま。系。萩。の。何。処。と。狼。藉。者。を。組。留。り。と。燈。燭。を。り。と。束。む。と。呼。る。声。小。俊。平。の。吐。嗟。と。騒。ぐ。心。の。轉。倒。敵。の。大。刀。取。次。の。腕。系。を。し。透。間。は。た。ま。は。け。入。居。る。枕。振。閃。め。り。と。晋。心。薙。刀。は。俊。平。の。左。の。脇。刀。尖。深。く。か。け。られ。と。一。声。苦。と。叫。び。も。あ。む。醫。居。は。控。と。俯。し。と。げ。り。浩。処。は。系。萩。の。稍。埋。火。を。掻。起。し。焔。見。索。く。く。く。と。底。の。燭。を。棄。て。走。り。本。ある。灯。光。は。た。め。め。面。を。あ。ら。ま。る。主。客。の。仰。天。大。さ。る。を。ゆ。ゆ。ゆ。秋。布。主。従。仇。人。鼠。川。加。二。郎。と。あ。ひ。あ。の。入。る。と。七。齡。五。十。は。あ。ま。り。く。る。半。白。の。翁。を。似。

たる。所。の。これ。も。亦。右。の。眼。の。瞽。る。の。ま。の。面。影。と。年。歳。の。似。え。る。ゆ。あ。ら。ば。り。け。り。又。この。あ。ら。ば。組。布。の。齡。廿。は。足。ふ。と。あ。り。た。いと。唯。妍。る。女。子。ゆ。く。又。の。枕。は。斫。仆。され。も。素。系。と。認。ら。ぬ。男。子。わ。ら。が。素。系。死。荒。栲。の。四。天。と。の。我。衣。を。被。く。あ。ら。ば。白。栲。の。顛。纏。を。あ。ら。女。子。と。亦。白。無。垢。の。夾。衣。は。白。練。の。禪。を。被。う。る。打。扮。の。尋。常。な。ぬ。由。送。小。あ。ら。ば。け。り。ぬ。る。折。ら。り。外。面。小。夜。修。行。を。る。旅。虚。無。僧。の。二。人。さ。く。束。之。林。九。論。と。吹。ま。ま。心。尺。八。殘。耳。ゆ。め。ゆ。け。ぬ。あ。ら。の。翁。の。怒。る。声。を。ゆ。り。あ。く。噫。訝。し。死。婦。女。子。の。拳。動。を。仇。人。と。呼。り。け。り。と。あ。ら。ば。所。以。の。や。あ。る。時。宜。小。よ。く。命。を。負。入。る。の。来。歷。共。の。小。む。と。と。急。し。問。れ。と。秋。布。の。面。を。げ。る。声。隱。り。と。俺。們。の。親。良。人。の。誰。言。敵。を。冤。鬼。ふ。り。あ。ら。ば。その。名。を。使。く。素。系。の。ま。る。人。面。を。ゆ。り。間。首。を。あ。ら。と。る。人。を。認。り。ま。る。と。疎。忽。と。以。釋。へ。く。も。あ。ら。ば。と。然。り。と。と。亦。所。以。の。や。あ。ら。ば。



縁故と具よ生口んふのよを放て多う。とよまあるへ領を。膝解退けく。起せ秋布はうち落され短刀と檢とり。輕な飲め夜領を合へて連而。目と拭ひ御高も名生口りたり。と定るをばれざりけん。とらるる録倉なる。執權家の御内人瀬川采女吉次が妻名を秋布と呼ぶ。の之良人吉次の。執權の舊臣鼠川加二郎とのふの敷され。父博多弥四郎も亦加二郎の。奸計よよく。無實の罪を命を預せり。とらるる質強の身もある。は。とどのも武士の女兒武士の妻の。仇人を敷んとてこれる義供村澤俊。平只一人相具くと。二稔以來旅宿し。所在を搜索れども。便の。小前月浪速ゆくり。親の舊侍る。関ヶ原七といふ。圖ら。し。仇人の所在を定る。知りぬ。肥前國彼杵郡伊万里の。士。その姓名の鼠川加二郎。一眼瞽く。隻足。薄う。原の録倉。武。士。

ねと入傳は。仇人の素より。一眼瞽く。隻足も亦少許痺る。その姓名の疑ふべくも。あられ。の地を投ぐ。卦折箇様々々の故を。七の浪速小田主後二人舟行より。け。旗津の湊。著ぬ。要時。猶豫。ま。死。の。素。よ。ま。ある。王。葺。時。の。名。を。知。る。の。人。を。認。め。傳。早。や。疎。忽。の。聞。戦。人。違。せ。の。組。布。れ。の。艱。苦。は。后。後。平。の。深。瘻。を。負。ぬ。斯。ま。毎。は。飛。鳥。の。鴉。の。此。角。飲。組。歸。の。微。運。を。猜。ひ。依。と。の。ひ。ら。鼻。を。うち。あ。み。さ。の。物。を。手。枕。糸。井。秋。を。理。り。と。も。今。あ。ら。な。慰。る。の。姥。捨。の。月。さ。ら。ち。望。の。夜。の。影。を。愛。く。や。吹。く。尺。八。の。門。の。音。律。も。止。は。け。り。あ。の。下。は。ら。く。ら。使。く。感。嘆。し。く。貌。を。改。め。遅。下。れ。多。烈。女。の。魂。成。と。敗。れ。時。運。不。依。れ。も。志。は。多。く。ゆ。き。未。世。の。美。談。と。る。ま。の。む。り。唐。山。あ。も。の。例。あり。魯。の。留。目。を。賢。人。と。す。宋。あ。も。亦。魯。目。と。呼。ぶ。

なる悪棍あり宋の曾參人を殺し曾子の母を驚かし孔子の面影陽虎に
似されば遂に陳蔡の厄難あり姓名と股體の不具と烈女の鯀に似たり
正亦怪しむ足らむといふも氏への根塚より鼠川と同トく且俗稱を
若二郎之隱居し推跡を語黙齋と唱ふものも鼠川加二郎と又根
塚若二郎との訓讀の相似さもかくこれを真名を字せ聊も同トりた
傳聞の錯誤の所云耳食の迷ひまされ亦一奇談といふ死の要る死言ふ
似されども疑ひを釋せんあふ素生を具は告ん心を鎮めばはる敷
るねども某も北條譜第の家臣あり先君最明寺殿のあは時某とて
守の長男時輔朝臣に隸られり今も君時輔朝臣の守の長男あり
けれども妾腹よりより家督あらはれ御舎弟時宗朝臣とて箕衣を
嗣いぬへ時輔朝臣とこれを怨む遂に逆謀の萌あり三綱持は乱せん

とせし時の不祥の悲しき某折る面を犯し諫言を乞ふ及不
聽を秘し已てを身を退死す且京師は月日を送れ有然程の時輔
朝臣の六波羅の廳に居られ帝廟の守護あり時筑紫の探題経高
朝臣と密に志を合せ最明寺殿卒去の後謀反の氣色顯すと時宗
朝臣を猜して欺死す京師より忽地誅戮せられ故に経高の
免れりしとせしけん遂に反逆の旗を揚し西の波風うち騒ぎの時宗朝
臣の武徳よりとせしやゆりて三稔より但経高の性方まれば存亡定
るらざるの時輔朝臣の自滅の一條不幸より先見の遠きより亦
はるふ心は快くねば誓言又他姓に仕む又故ありとる地は親り住
しより文学武藝の師とあり弟子附し比風眼よりとて隻眼を失ひ亦
風濕よりとて隻足痺りこの故に隱居し語黙齋と自稱せり又これ

るのつら妻ゆく名を枕と呼ぶ。その親の豊後。玖珠の豆町の莊屋
より折竹二三六が女見ると、所縁を継母の悪心ゆへ十五の時花街に賣ら
まゝ。京師六條の妓院あり。比どのいふは故あり。某これを携ふ。この
地を移り住み。後女の子系杖を産む。死系杖は今母の傍に侍居。即渠之
四稔なる前。比同國末の罷華る。瀬川浦二郎と縁し。結ぶ。納米を
と替せり。その比某病著起。婚姻遲滞。及六程。その次の年の春
浦二郎のその家兄瀬川吉次を送らん。為鎌倉へ赴く。よその光母玉嶋の
物故のよしと告ぐ。末く一宿も留り。辞し去り。今に至る音耗りけ
れ。女見とあり。いふ。豈出らんや。人違ひ。慢み。これを敷きんと。あつ。烈女秋布主
せぬ。日もある。いふ。豈出らんや。人違ひ。慢み。これを敷きんと。あつ。烈女秋布主
後。いふ。豈出らんや。人違ひ。慢み。これを敷きんと。あつ。烈女秋布主

傷害の事。いふ。尚幸い。似れども恨ら。忠義の杜。俊平。年。の。救。す
よ。る。た。所。の。深。穢。も。命。運。と。い。ひ。ま。ら。痛。ま。さ。い。ひ。ひ。も。ま。る。眼。包。を
ま。さ。け。け。秋。布。の。面。を。と。又。哀。も。一。入。り。流。る。涙。を。押。拭。ひ。と。巨。細。を
あ。ん。物。を。を。管。々。感。ひ。の。覺。し。よ。う。と。い。ひ。ま。ら。置。と。ま。る。く。け。り。
彼。鼠。川。加。三。郎。と。又。根。塚。若。二。郎。と。ま。ら。嘔。吐。を。片。け。り。と。文。字。の。大。く。異。る。と。
約。間。の。け。る。疎。函。さ。よ。如。以。亡。夫。の。家。弟。の。舅。姑。と。鏢。を。削。り。疎。忽。し
よ。命。基。を。俊。平。が。斯。る。け。る。も。主。後。の。皆。行。愈。より。起。り。ぬ。と。是。の。身。を
恨。の。と。恥。さ。す。と。ま。ら。い。ふ。包。を。い。る。袖。の。雨。果。一。存。を。想。像。さ。し。枕。の
慰。め。の。と。縁。は。係。親。死。達。と。ま。ら。ぬ。の。い。ひ。ま。ら。習。ひ。と。馴。れ。難。刀。の。つ。ら。か
拙。死。の。ま。ら。い。も。折。主。の。後。室。を。組。布。れ。し。駭。死。の。透。間。は。け。り。行。ひ
功名。る。ぬ。今。さ。ら。後。悔。要。る。所。の。た。け。と。勸。解。す。額。を。押。拊。と。歎。息

まれの糸共其の眼を潤く生別させ一郎の性方を想像さす悲しき
死別れぬゆゑ其の為は暖れ毒の相応しく仇敵の人違しく只一人も
忠義我れ死後者を敷く便著る死心細さるん痛すゆゑ
うけく背向する目と拭く若二郎声を励しく益益の詩言千萬句も
傷人の為はさるやあらんやゆも深痕とるもれども緯断するや合を
届ぬまをも双抱せざると呼活よとくと良人は心つけられぬ枕を
平が母とる寄やろまをうけて杖起せ六積る鮮血は声を隠し
俊平とのとゆらんあひひは似て痕は浅る心をたふさるや
萩の俱は右より左より声を合して呼活よ俊平眼をさして左見右見
はく息を吻死炎所の深痕はあられもを伏死も果ざるを面目するは
とる圖もむも若二郎と御夫婦の物心すやく因果の道理を悟りぬ

喃妖止毒二三郎ふひも幼稚な時小別れし途に認忘れさるけを
あひる死對面とてといふは枕敬馬とてを姉と呼うけ云云と名生
るの原來おん刃のころは為は異母の弟る二三郎ゆかりの秋あら
何とせん二十餘あり信るは弟は環會ひる途に標を削るを挑戦ひ
勝傷を負せしを悲しけれと歎けは俱は糸萩もあられもを曾漬れ末
期るは叔父匠の涙とて名對面を思ふは勲も秋布も亦敬馬に
嘆くは哀しく痛しくあられも有敷糸は羞くらち目成るのを双抱を
も枕親子もち任しく間近くは又若二郎とるを死眼を
閉く觀念の外は他者もさうけり登時俊平の突立するを置くるは又
數回息を吻死喃妖止毒の悔と歎けぬる某が斯るは皆是母の
悪業のこの男は報ふ因果にそつ親の非を頭を小似れぬむ

余本傳

小本己

悪心あり父を勧めく河竹の流れの淵に身を沈めたる身價を私しくよ
 らぬ人とまらぬひの家の乱もふれその大人の氣病を患ふ世を逝りぬひ
 家産断絶をくれば某と里人の好意より肥前國御厨の御を起して
 瀬川健二道孝ゆふ童奉公せし時より母の氏を冒して村澤俊平
 と名告り然りければ心は羞くら母のうへに故郷の人も人語ら
 ぶ素より不才なるをく道孝吉次二代のまはし給あるはまも果敢
 果敢たる功も一切く主恩を報せん為後室の乳供して三稔以來艱
 苦を辞せぬ仇人を索廻れども仇人はあつても非命よこの身を
 果たぬ親の因果の子は報らむ天道忠義を憎むとらん致さるあれ
 どの某が心は亦復恥る事あり仇人を討しめを懺悔し法師よ
 るんと思ひても空望する死に罪深き後室さるも聞し召れよ

